まち歩きの愉しみ方
～大阪、オルタナティブ・ツアーへの誘い

栗本 智代

ガイドでまちの素顔を紹介する

余暇や気分転換に、知らないまちを訪れる際、あるいは知っているまちを改めて歩く時、人は何を求めているのだろう。

旅のかたちが変わってきた。市販のガイドブックに紹介されている名所旧跡を次々に見てカメラにおさめるという、忙しく移動してまわるだけの旅は、ひと昔前のものである。最近では、各人のニーズや目的に応じて、インターネットやツイッターなどで情報を収集し、旅の内容を決めていくことが増えているが、特に、国内の主要な都市で、静かに人気を集めているのがまち歩き、それもガイド付のツアーである。

ガイドというのは、もちろんプロやボランティアの案内人の場合が多いが、所定のエリアについて細かい情報を掲載した親切なMAPや、地元発のまち歩き指南書も喜ばれている。ガイド付まち歩きツアーは、九州の別府温泉界隈や長崎市内などで開催された〝まち歩きイベント〟の成功を契機に全国的にブレイクしたようだ。この手法をまさに大阪でも取り入れた結果、今では行政や民間の複数の団体でまち歩きツアーを催行しており、そのコース数はすでに200を超えている。しかも口コミで、着実にファンを増やしている。

大阪は、長い歴史を持ち、観光や地域振興の資源がたくさん埋蔵されているが、来訪者に対しても地元民にもまだまだアピール度が足りず、タコヤキ、グリコのネオン、お笑い（吉本）、タイガースなどの偏ったイメージのみが浸透しすぎている。あまりにもったいない。

通り一遍のステレオタイプではない多彩なまちの魅力を紹介することこそ、まち歩き・まち遊びプログラムの使命であろう。既存の観光ルートや常識的な視点では体験することのできないまちの素顔や見どころを、いかに伝え、理解してもらい、味わって感動してもらうかがもてなす側の課題である。それで、新たな興味を持って「面白い！」「また来たい」と喜ぶビジターの顔を見るのが、ひとつの醍醐味となり、また新たなプログラムを生む起動力になる。わがまちを誇りに思う住民が増え、さらにビジターへの人気が増し、結果としてまちで交遊する人により賑わいが生まれる。これがまちの活性化につながる。

建物全体が博物館のような、大丸心斎橋店・本館（外観）

昔、そごうのファサードにあった「飛躍」像。現在大丸北館の屋上で、当初見られなかった後ろ姿まで見学できる

今も、石造の心斎橋の一部が路上に残る

もうひとつのミナミを発見する

大阪の街で、偏ったイメージが浸透しているエリアの代表格は、ミナミであろう。コテコテで猥雑なネオンの街というイメージだが、それとはまったく違う表情もあちこちで楽しめる。たとえば、近代遺産やアートといった視点から見た、魅力ポイントをいくつか紹介しよう。

まず、歴史の断片を今に残す橋、「心斎橋」。今は駅名、地域名としてしか認識されていないが、昔は実際に橋があった。1873年（明治6）木橋から鉄橋へ架け替えられ、文明開化の象徴と注目を集めたが、さらに1909年（明治42）に、石造に架け替えられる。欄干にくりぬかれた丸い十字の模様やガス灯もあわせて、非常にノスタルジックで人々に愛された。その石橋の一部が、実は、現在の長堀通りの交差点、横断歩道の真ん中に残っており、橋の親柱も昔のままである。心斎橋界隈は、明治後期から昭和にかけて、時代の最先端をいくモダンなアートや文化がアーケードや百貨店を中心に花開いた場所である。その足跡がきっちりと残されている。

百貨店では、昭和初期に、近代建築物の代表格として、御堂筋に面して、そごう、大丸が隣接して建っていた。1933年（昭和8）に完成した大丸は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ建築事務所による、

大丸心斎橋店・本館入り口のピーコック

荘厳でゴージャスな西洋風の意匠。一方、1935年（昭和10）に村野藤吾が建築したそごうは、シンプルな和風調モダン。大丸心斎橋店・本館は、現在もその意匠をほとんどそのまま残しており、建物全体が博物館のようである。そごうは、建て替えられ、現在大丸北館になっているが、当初のファサードにあった「飛躍」像（写真は前頁）や、天井のデザインガラス、漆螺鈿（らでん）装飾のエレベーター扉などが館内に残され、自由に鑑賞することができる。

現存する、モダニズム建築としての百貨店といえばもうひとつ、場所は日本橋の堺筋沿いに移るが、高島屋東別館がある。大正時代の堺筋は、競合する百貨店通りになっており、北浜に三越、備後町に白木屋、長堀橋に高島屋があった。日本橋には当初、松坂屋が進出したが、後に高島屋がここを買い取った。NHKの朝のドラマ「カーネーション」で当時の百貨店としてロケ現場に選ばれるほど、華麗で格調高い雰囲気を持つ。現在2階は高島屋史料館になっており、自由に見学ができる。

道頓堀に出てみよう。戎橋のすぐ南側に松竹座が立つ。1923年（大正12）に竣工した、米国製テラコッタをふんだんに使った、ネオ・クラシック様式の近代建築である。江戸期から、芝居街として栄えていた道頓堀だが、幾多の芝居小屋もその姿を消し、今では松竹座がその役割を一手に引き受けているかのようだ。

道頓堀から法善寺横丁あたりの、橋や名店の前などに、碑がいくつも立っている。たとえば、昔は芝居茶屋であったという「道頓堀今井」の店頭には、川柳作家の岸本水府が、初代中村鴈治郎のことを「頬冠りの中に日本一の顔」と詠んだ句碑が立つ。相合橋の北詰には「盛り場をむかしに戻すはしひとつ」という食満（けま）南北の句碑。法善寺横丁に行くと、織田作之助をはじめとする文人たちの句碑や歌碑が点在し、大正から昭和にかけ、このまちがいかに愛されていたかがわかる。実際に、法善寺横丁をはじめとして、多数の文学作品の舞台にもなっている。

世界を舞台に活躍するアーティスト、デヴィッド・サーレ（David Salle）が、大阪をイメージして描いたという作品。地下街・クリスタ長堀の最も西端の吹き抜けに展示されている

さらに、横丁の路地を西に抜けると「上方浮世絵館」がある。世界で唯一、上方浮世絵を常設展示する私設美術館であり、まさに、昔役者がそぞろ歩きをしたまちで、自身の浮世絵コレクションを披露したいという館長・高野征子さんの夢が実現されたものである。1階のショップも、歌舞伎に関連したグッズ、手ぬぐいや風呂敷、招き猫など、縁起のいい小物類を置いており、外国人にも人気がある。

他にも、意外なところに、世界的に有名なアーティストの作品が掲示されていたり、路地の片隅に町家を改装したギャラリーがあったりと、芸術・芸能、文学、アートの街としてミナミを訪ねると、また新たな側面が愉しめる。ひとつひとつ、その価値があまり知られていないことも多く、わかりにくい場所にあるため、案内人や地元発のガイドの案内が生きてくる。

法善寺横丁には、このまちを愛した文人たちによる句碑・歌碑が並ぶ

今後の課題―協働と情報発信

以上は、ほんの数例に過ぎないが、このような魅力あるコンテンツを、あるコンセプトやシナリオでつなげて見て歩くと、まちの背景となる物語も同時に味わいながら、理解が深まっていく。意外性があればなおさら面白い。

現在は、まち歩き・まち遊びなどの体験プログラムが更新されており、あるいは、まちのエピソードやシナリオについては、各地の語りべの活動や著作物などで、個人や団体が各々のスタンスで活動を同時進行で催行している。今後は、必要に応じてつながり、協働することにより、さらにわかりやすく楽しいプログラム・商品が展開できるはずである。

ただ、大阪全体のプログラムを総覧できる、情報発信拠点がまだ整備されていない。現状は、口コミか、偶然情報を発見したお客さまが多く、一般の生活者、旅行者予備軍の人に効率よく情報発信できていない。ネット社会の特性を活用しつつ、インターネットが苦手なシニア層などにも対応できるよう、発信手法を工夫する必要がある。また、大阪にとどまらず関西にもネットワークを拡げて、住民参加型の仕組みも整えつつ、ホスピタリティの質を上げていく試みが必要だ。

何はともあれ、まずは足を運んでいただき、ガイドツアーやMAPを活用しながら、もうひとつの、いや本来の大阪の姿を知り、まち遊び体験をする機会を持っていただければ幸いである。

（大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所 研究員）